

## 北前船をテーマとした広域観光に関する基礎的検討 —北前船関連観光資源の全国調査を中心として—



### 1. 研究の背景と目的

#### 1-1. 広域観光への期待

近年、価値多元社会の中で観光ニーズが多様化している。こうした多様化を支えるように、交通基盤整備の充実、カーナビゲーションシステムの普及等が進み、観光客のモビリティも向上して観光の広域化が進んでいる。このような多様化・広域化する観光ニーズを前提として、自治体ごとの観光政策とは別に、他の市町村と連携して実施する広域観光の積極的な展開が期待されるようになってきている。例えば、社団法人日本観光協会では国内観光の更なる振興を図るため、2000年度から全国の都道府県及び都道府県観光協会（連盟）と連携して、「全国広域

鈴木 智香子、中島 直人、江口 久美  
Vichienpradit Pornsan、北村 修一、  
長澤 怜、山田 渚

観光振興事業」を実施し、特にここ数年では、「観光を考える百人委員会等の開催（2006～）」「国内観光需要喚起キャンペーン（2007）」「ブロック別広域観光振興事業（2006）」など具体的なプロジェクトを打ち出している。また、日本観光協会の機関誌『観光』でも、広域観光はたびたび特集で取り上げられるようになった<sup>(1)</sup>。

本稿では、「既存の行政区域にとらわれずに進める観光」と定義される<sup>(2)</sup>この広域観光について、観光客の視点からのみならず、地域にとっての価値を重要視する観光まちづくりの視点からアプローチしていく。つまり、広域観光は観光客にとっては、観光の選択肢が広がることになることに違いないが、一方で各地域にとってみても、各地域に個別に存在する資源が他地域と資源と結びつけられることで、総和としての価値向上を享受することができる点で魅力的である。そして他の地域との連携が必然的

(1) 日本観光協会発行の月刊『観光』では、巻頭言「広域行政と広域観光」（1970年）や特集「観光ルート」（1978年）など、広域観光の必要性を唱える記事や特集は1970年代から散見されるが、頻繁に見られるようになるのは、1990年代後半以降である。例えば、特集では、「観光における地域連携」（1997年9月）、「検証！広域観光」（1999年11月）、「新世紀の観光地域づくり」（2002年9月）などがある。

(2) 文献1)より

にもたらず比較や競争的な枠組みは、地域の個性を引き出すことになり、相対的に地域の魅力が浮かび上がることが期待されるのである。

### 1-2. 広域観光の具体的な取り組み

広域観光の具体的な取り組みについては、中尾（2005）が連携の仕方に着目して表1のように整理している。実際、現在全国で多様な切

り口、連携の仕方で行われていることが分かる。例えば「朝鮮通信使縁地連絡協議会」による取り組みから、NHK 大河ドラマ等を活かした取り組みまで様々な態様が現実に見出せる。また、川筋を通じた連携における、熊野古道、四万十川などを活かした広域観光など、必ずしも現在実施されているものではないが、今後想定されるものも多い。

表1 広域観光の連携の仕方

分類	広域観光の連携の仕方 (既にやられているもの)	広域観光の連携の仕方 (想定されるもの)
1. 大規模な地域・拠点都市の連携	全国京都会議、京阪神三都市観光連絡協議会、歴史街道推進協議会、九州観光推進機構	
2. 東日本と西日本の拠点都市の連携		横浜と神戸など
3. 同一府県内の連携	岩手県内「NHK大河ドラマ『義経』いわてゴールデンサポート協議会」	近隣で都市の性格が異なっている神戸と姫路、横浜と鎌倉など
4. 街道を通しての連携		熊野古道、奥の細道、東海道、木曾路など
5. 海道を通しての連携	朝鮮通信使縁地連絡協議会	北前船の寄港地、しまなみ街道など
6. 港町や夜景を介しての連携	日本開港五港都市観光協議会	日本三大夜景など
7. 川筋を通しての連携		四万十川、紀ノ川の流域など
8. 温泉地を介しての連携	日本三名泉	日本三古湯など
9. 世界遺産を介しての連携		
10. 山と海を介しての連携		
11. 近隣の外国の都市との連携		福岡・釜山・上海など
12. 文学作品を介しての連携		『万葉集』、『源氏物語』、『太平記』、『太閤記』、『奥の細道』、『東海道中膝栗毛』、『江戸参府旅行日記』、『海遊録』、『街道をゆく』、『菜の花の沖』など

(文献1より著者作成)

### 1-3. 広域観光資源としての「北前船」への着目

本稿は、こうした多様な様態が想定される広域観光のうち、「北前船」をテーマとする広域観光に着目して、その展開の可能性について北前船関連観光資源の現状に基づいて検討を行うことを目的としている。北前船に着目する理由は以下の3点である。

#### ①北前船航路の広域性と寄港地の多様性

北前船寄港地である港町は、その数が多く広域に分布し、多様性を有している。北前船は、江戸期から明治中期にかけて、東海道と並んで我が国の交通機関の一翼を担い、北海道から日本海沿岸、そして瀬戸内海へと回り、その過程で各地に寄港していた。従って、北前船の寄港地は広域に分布しており、かつての寄港地を有

(3) 文献 2) 3) より

する自治体は138<sup>(4)</sup>もの数に上る。また、広域分布および数の多さゆえ、寄港地である港町は、規模や立地の面の違いからそれぞれ独自の個性を有している。従って、北前船という共通の観光資源を有しつつも、歴史、文化的文脈は極めて多様であり、広域自治体での連携及びネットワーク形成の効果は大きなものになると予想される。観光客からみてもバリエーション豊かな観光資源を体験することが可能であるため、多様なニーズに応えることが可能であると考えられる。

## ②北前船関連観光資源の多様性と相互連関性

北前船の寄港地には、北前船に関連する歴史的港湾施設や建造物から、絵馬や力石、そして諸品まで多様な観光資源が各町の生活文化と一体的に多数存在している。しかも、これらは、その町だけでなく当時北前船を通じて交易関係にあった他の町の歴史・文化をも物語ることも多い。つまり、北前船の観光資源は多様性を有し、かつ交易がもたらす相互連関性を有する点で、広域観光に寄与する点が大きいと考えられる。

北前船を使って、塩、米、酒、ニシンのしめかすや昆布といった海産物などの食料品をはじめ、家財道具、衣類、紙、蠟燭などの生活関連物資など、あらゆる商品が売買されていた。こうした物資は、様々な形で現代にも受け継がれており、各地の名産品として健在である。

## ③北前船と港まちづくりとの連動性

近年、港まちづくりや海洋観光の推進を背景

として、港町が観光地として大きく脚光を浴びるようになってきている<sup>(4)</sup>。北前船は、第一に港町観光という点、第二に各港町間の遊覧観光という点から、この港まちづくりの展開と連動している。つまり、まちづくりや観光の現代的な課題や動向の面からも北前船は重要なテーマであると認識される。

実際に、これまでも北前船をテーマとした広域的な連携の試みがなされてきた。例えば、1986年には兵庫県から北海道まで全国21の港をつないで北前船大回航が実施された。また、1991年からは1年おきに北前船「西廻り航路フォーラム」が、1996年から2003年にかけては毎年「北前船市町村サミット」が開催された。また、1998年2月には、財団法人日本ナショナルトラスト及び社団法人日本観光協会の主催で、「北前船町づくりシンポジウム」が福井県三国町で開催され、江差（北海道江差町）、黒島（石川県門前町）、三国（福井県三国町）、河之浦（福井県河野村）、温泉津（島根県温泉津町）、御手洗（広島県豊町）の各町が参加して、北前船を主題とした議論が展開された。

しかし、何れの試みも、シンポジウムやフォーラムといった形での各地の取り組みの報告、情報交換に留まっており、具体的な広域的な観光施策の実施にまでは発展していないのが実状である。そもそも、北前船をテーマとした広域観光の可能性を検討する際に必要な、北前船寄港各都市での北前船の観光資源化の現状

(4) 例えば、日本観光協会発行の月刊『観光』では、国土交通省港湾局による「みなとまちづくり」の推進と合わせて2005年7月から「みなとと観光」と題した連載が開始され、現在も続いている。また、海洋観光についても「海を活かす」（2002年7月）、「海の恵み」（2003年8月）、「海の恵みと観光」（2006年7月）など、近年、定期的特集号が組まれている。

についての悉皆的な把握も行われていないのである。

本稿は、以上に述べた状況を背景として、北前船に着目し、その広域観光のテーマとしての可能性の検討、提案のための基礎作業として、北前船寄港地における、近年の北前船に関する観光施策の全国的動向および先進地の特徴について、報告するものである。

#### 1 - 4. 「北前船」に関する既往研究

北前船に関する研究は、歴史分野に多く見られる。牧野（2005）<sup>(5)</sup>は、北前船関連の研究について、戦前は海上交通史の数少ない研究テーマであったが、戦後は地方史研究の高まりの中で急速な発展をみるようになったと言う。特に、海運史として航路や経営、中でも雇傭や収益といった面や、造船史学的な船の構造、形態、船具といったものや民俗学的な海事慣習、儀礼等に注目すべき成果を挙げたが、一方で、そうした研究は、特に北陸地方に偏ったものであったとする。牧野自身は、北前船の経営、航海、北前船が育んだ文化などについて全国を対象として研究を行っている。

その他、北前船関連文献としては、その歴史を題材にした物語<sup>(6)</sup>や博物館の資料集<sup>(7)</sup>なども多数存在する。

つまり、北前船の歴史的史実や文化的価値に関しては、多くの研究が蓄積されている。しかし、そうした歴史的、文化的な存在である北前

船を現代の観光政策にどのように活かしているのか、あるいは活かしていくのかについて検討した研究はない。さらには現代における広域観光施策との関係で北前船に着目した研究は皆無であると言ってよい。従って、本稿の意義は、北前船研究に新たな視角を提供するという点にも見出されるであろう。

## 2. 観光資源としての「北前船」の活用に関する全国的動向

### 2 - 1. 調査方法

1で述べた問題意識に基づいて、各自治体における、観光資源としての北前船についての意識または活用の実態に関して全国的な傾向を明らかにするため、アンケート調査を実施した。アンケート対象は、北前船寄港地を有する138自治体の観光担当課とした。郵送にて配布、FAX または郵送にて回収する方法で、2007年8月27日～9月8日に行った。138自治体のうち、124自治体から回答を得た。回収率は89.9%に達した。

アンケートの質問事項は以下の通りで、近年（ここ5年）の取組みについての回答を得た。

●北前船をまちの観光資源としてどの程度、意識または活用しているか。

- ・ 北前船を主題とした資料収蔵・展示施設（建物、現在の所有者、現在の管理・運営者、観光客の割合、資料・展示物、他の港町の紹介）

(5) 牧野隆信（2005）北前船の研究、法政大学出版局

(6) 例えば、川渡甚太夫ら（1981）北前船頭の自叙伝、柏書房

(7) 例えば、市立函館博物館（1998）北前船と蝦夷地、市立函館博物館

- ・ 地元の郷土資料・民俗資料収蔵・展示施設（建物、現在の所有者、現在の管理・運営者、観光客の割合、資料・展示物、他の港町の紹介）
- ・ 文化財として指定している北前船関連の遺構
- ・ 案内板・説明板などを設置している北前船関連の遺構
- ・ 北前船関連のイベントや祭の内容
- ・ 北前船関連の勉強会や研究会（主催者、参加者、内容）
- ・ 北前船関連の商品の内容

●北前船関連の広域観光（交流自治体または参加しているネットワーク組織の有無、内容）

●北前船を活かした観光施策に関する計画（その有無、内容）

また、本アンケート実施後、アンケートの回答内容を踏まえて、北前船を積極的に観光資源として認識、活用していると判断された16自治体<sup>(8)</sup>については、その実態をより詳しく正確に把握するために、電話によるヒアリング調査を補完調査として実施した。

以下、本アンケート調査の結果を報告する。

## 2-2. 観光資源としての北前船の意識または活用の実態

### 2-2-1. 観光資源としての北前船の意識または活用の全体的傾向（図1）

まず各自治体において、北前船をまちの観光資源としてどの程度意識または活用しているか、との質問については、「特に何もしていない」が最も多く60自治体（48.4%）と全体の約半数を占める。しかし、逆に捉えれば、残りの約半数の64に及ぶ自治体は何かしら北前船を観光資源として意識または活用しているということでもある。

観光資源としての北前船の意識または活用の実態の内容について見ていくと、最も多いのは、「地元の郷土資料館・民俗資料収蔵・展示施設において北前船関連の資料を常設展示・収蔵している。」であり、47自治体（37.9%）である。次いで「北前船関連の遺構を文化財指定している。」が27自治体（21.8%）である。そして以下、「北前船関連の遺構に案内板・説明板を設置し

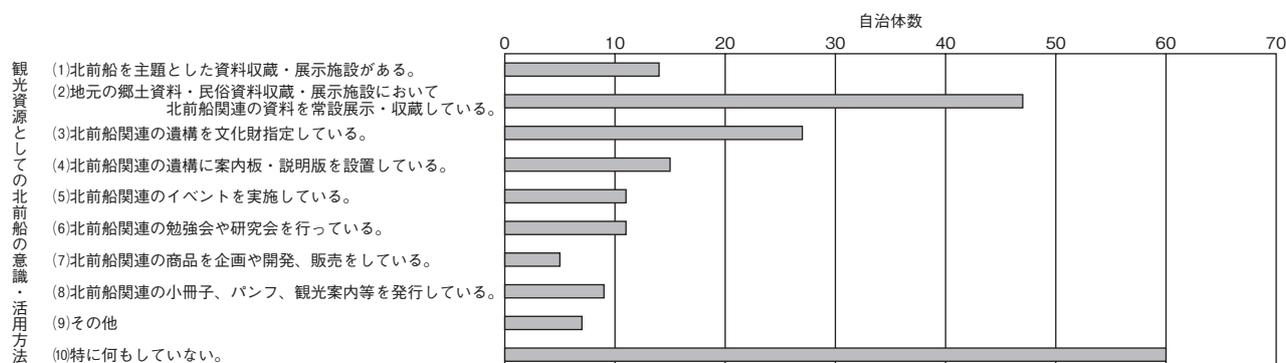


図1 観光資源としての北前船の意識または活用の全体的傾向（複数回答可）

(8) 北海道江差町、青森県野辺地町、新潟県佐渡市、新潟県出雲崎町、新潟県胎内市、山形県酒田市、石川県輪島市、石川県小松市、石川県加賀市、福井県南越前町、富山県高岡市、富山県富山市、鳥取県境港市、兵庫県新温泉町、兵庫県洲本市、兵庫県豊岡市

ている。」が15自治体(12.1%)、「北前船を主題とした資料収蔵・展示施設がある。」が14自治体(11.3%)、「北前船関連のイベントを実施している。」と「北前船関連の勉強会や研究会を行っている。」がそれぞれ11自治体ずつ(8.9%)、「北前船関連の小冊子、パンフ、観光案内等を発行している。」が9自治体(7.3%)と続いている。最も少ないのは「北前船関連の商品を企画や開発、販売をしている。」であり、5自治体(4.0%)のみであることが分かった。

「その他」の取組みという形での自由回答欄からは、下記のように各地域の個性を活かした多様な取組みがなされていることが明らかになった。

- ・ 北海道小樽市：講座や講演会を活用して、北海道開拓と北前船の役割を解説している。
- ・ 青森県大間町：小学校の郷土資料室に案内板を設置している。
- ・ 福井県坂井市：まちなかで、「三国湊き

たまえ通り」と名付けて町並みを保存している。

- ・ 兵庫県豊岡市：市役所竹野総合支所の建物の一部で北前船の型を使っている。
- ・ 島根県大田市：コミュニティセンターに北前船の模型を展示している。
- ・ 島根県出雲市：市発行冊子に北前船についての特集を掲載した。
- ・ 島根県安来市：北前船ゆかりの旅館(個人所有)がある。

## 2-2-2. 観光資源としての北前船の意識または活用実態の特徴(表2、図2)

次に上述の観光資源としての北前船の具体的な意識または活用実態の特徴について述べる。具体的な意識または活用実態としては、表2の通り、1項目若しくは2項目を挙げた自治体が大半であり、合わせて44自治体(69%)を占めている。一方3項目以上で多面的に北前船を観光資源として意識または活用

表2 観光資源としての北前船の意識または活用方法の広がり

観光資源としての北前船の意識または活用の項目数	項目内容(番号については、下記凡例参照)	自治体数	自治体名称		個数別自治体数	割合(%)	観光資源としての北前船の意識または活用の項目数	項目内容(番号については、下記凡例参照)	自治体数	自治体名称		個数別自治体数	割合(%)	
1項目	1のみ	1	穴水町		25	39	2項目	2-7	1	小樽市※		4	6	
	2のみ	20	松前町/上ノ国町/余市町/室蘭市/能代市/由利本荘市/鶴岡市/羽咋市/志賀町/坂井市※/与謝野町/香美町/安来市/萩市/倉敷市/福山市/尾道市/呉市/丸亀市/淡路市				3項目	2-3-4 2-3-8	3 1	野辺地町/酒田市/胎内市 江差町				
							4項目	1-2-5-6 1-2-3-4 2-3-4-6	1 1 2	小松市 境港市 出雲崎町/新温泉町				
								5項目	1-2-3-5-8 1-3-4-5-6 1-3-4-6-8	1 1 1	高岡市 富山市 輪島市			
									6項目	1-4-5-6-8	1			洲本市
2項目	1-3	2	函館市/男鹿市		19	30	7項目	1-3-5-6-7-8	1	加賀市		1	6	
	1-6	1	小浜市/深浦町				8項目	1-2-4-5-6-7-8	1	南越前町		1	2	
	1-8	1	光市				計	1-2-3-4-5-6-7-8	2	佐渡市/豊岡市		2	3	
	2-3	10	豊郷町				計		60			60	98	
	2-4	3	苫小牧市/佐井村/糸魚川市/長岡市/新潟市/七尾市/宮津市/たつの市/浜田市/近江八幡市				その他		4			4	6	
2-5	1	白山市/赤穂市/大阪市		合計		64			64	100				

凡例

- 1 北前船を主題とした資料収蔵・展示施設がある。
- 2 地元の郷土資料・民俗資料収蔵・展示施設において北前船関連の資料を常設展示・収蔵している。
- 3 北前船関連の遺構を文化財として指定している。
- 4 北前船関連の遺構に案内板・説明版などを設置している。
- 5 北前船関連のイベントを行っている。
- 6 北前船関連の勉強会や研究会を行っている。
- 7 北前船関連の商品を企画や開発、販売などを行っている。
- 8 北前船関連の小冊子、パンフレット、観光案内等を発行している。

※ 小樽市、坂井市は、その他の取組みあり。

している自治体も、16自治体（29%）あることが判った。

また、3項目以上の北前船を観光資源として意識または活用をしている自治体を立地面から分類すると、以下の通りになる。

- ・ 北海道：北海道江差町
- ・ 東北地方：青森県野辺地町、山形県酒田市
- ・ 北陸地方：新潟県出雲崎市、新潟県佐渡市、新潟県胎内市、石川県加賀市、石川県小松市、石川県輪島市、富山県高岡市、富山県富山市、福井県南越前町
- ・ 関西地方：兵庫県新温泉町、兵庫県洲本市、兵庫県豊岡市
- ・ 四国及び中国地方：鳥取県境港市

つまり、北陸地方（新潟県・富山県・石川県・福井県）と関西地方の日本海側（兵庫県）が多く、四国及び中国地方（瀬戸内海側）が少ないことがわかる（図2）。北前船寄港地という共通性を持ちつつも、往路の積荷地、復路の積荷

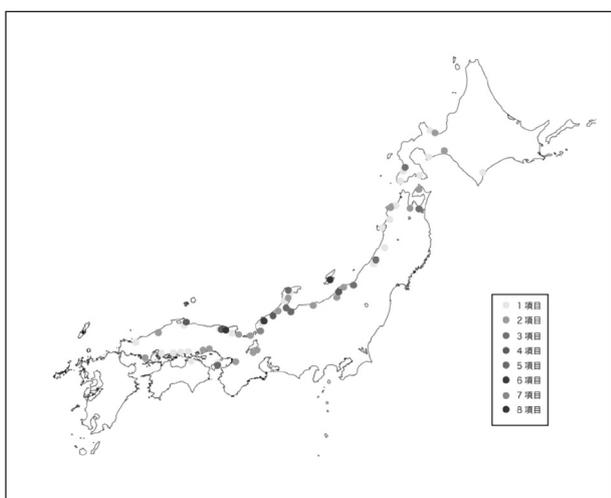


図2 観光資源としての北前船に関する意識または活用項目数別プロット地図

地といった相違が現在の観光資源としての意識や活用にも影響を及ぼしていると考えられる。

## 2-3. 観光資源としての北前船関連の収蔵または展示物の保全状況とその活用実態

次に、各自治体における北前船関連の収蔵または展示物の保全状況を明らかにするとともに、その活用方法について明らかにする。

### 2-3-1. 資料収蔵・展示施設における具体的な収蔵または展示物と施設の状況

#### (1) 北前船を主題にした施設（表3）

① 資料収蔵・展示施設の概要：北前船を主題とした資料収蔵・展示施設は、14自治体に17施設あることが分かった。施設名を具体的に以下に示す。

深浦町風待ち館、春光山円覚寺（青森県深浦町）、海運資料館、白山丸資料館（新潟県佐渡市）、高岡市伏木北前船資料館（富山県高岡市）、北前船回船問屋森家（富山県富山市）、北前の里資料館（石川県加賀市）、廻船問屋沖屋、曳船展示館（石川県小松市）、黒島天領北前船資料館（石川県輪島市）、千石荘（福井県小浜市）、北前船主の館右近家（福井県南越前町）、（財）豊会館（滋賀県豊郷町）、高田屋顕彰館歴史文化資料館（兵庫県洲本市）、北前船資料館（兵庫県豊岡市）、光ふるさと郷土館（山口県光市）

これらの施設の分布は、意識および活用実態の特徴で先に言及した状況と同様に、北陸地方（新潟県・富山県・石川県・福井県）と関西地方の日本海側（滋賀県・兵庫県）に集中している。

また、これらの施設のうち、半数以上にあた



れらは現在観光施設として一定の役割を果たしていることが明らかになった。(表3の4)

⑤ 展示施設における他の港町の紹介：海運資料館、白山丸展示館、北前船資料館では、全北前船寄港地の情報を紹介していることが分かった。その他、高岡市伏木北前船資料館、北前船主の館 右近家、高田屋顕彰館歴史文化資料館、光ふるさと郷土館でも、関連のある港町の情報を紹介していることが分かった。しかし総数から見れば、こうした北前船の広域性を意識させる展示を行っている施設は少数に留まっていると言えよう。

## (2) 地元の郷土資料・民俗資料収蔵・展示等の施設 (表4)

① 展示施設の概要：地元の郷土資料・民俗資料収蔵・展示等の施設における収蔵・展示は、47自治体、64施設で行われている。このうち、45施設(70.3%)については、既存の資料館等での収蔵または展示である。

一方、8施設については北前船関係の歴史的建造物を活かした施設での収蔵・展示も行われていることが分かった。具体的には、旧中村家住宅、横山家、旧関川家別荘(北海道江差町)、小樽市総合博物館分館(北海道小樽市)、国指定史跡旧余市福原漁場(北海道余市町)、重要文化財旧三上家住宅(京都府宮津市)、室津海駅館(兵庫県たつの市)、むかし下津井回船問屋(岡山県倉敷市)である。これらの施設を有する自治体では、北前船は地域の歴史や文化を体現する最重要な資源として位置づけられていると考えられる。

② 施設の所有者及び管理者：施設の所有者及び管理者の傾向としては、行政がその大半を所有しており、管理者も行政である場合が殆どである。但し、既存の地元の郷土資料館のため指定管理者制度を利用している自治体があることが分かった。(表4の2、3)

③ 具体的な展示物、収蔵物：展示または収蔵物としては、「北前船の復元模型」が最も多く、37施設(57.8%)にある。次に「北前船やまちについて説明したパネル」が26施設(40.6%)で収蔵または展示されている。そして、「北前船関連の絵馬」、「船乗りの道具」がそれぞれ20施設(31.3%)で、「北前船関連の古文書」が16施設(25.0%)、「錨」が12施設(18.8%)、方角石が4施設(6.3%)、力石が2施設(3.1%)で収蔵・展示されている。

その他にも、多様な資料が各地にある。例えば、羽咋市歴史民俗資料館(富山県羽咋市)では、船大仏が収蔵または展示されている。

④ 観光客の利用状況：観光客の割合としては、表4で利用率が10%を下回る5施設を除けば、施設の利用者の7~8割が観光客であり、これらは現在観光施設として一定の役割を果たしていることが分かった(表4の4)。

⑤ 展示施設における他の港町の紹介：他の港町に関する情報を紹介している展示施設は、12施設(18.8%)であった。このうち8施設は、全国の寄港地に関する情報である。一方残りの4施設については、当時から強い結びつきのあった港町、地理的に限定した紹介を行っている。



### 2-3-2. 文化財として指定している北前船関連の遺構

北前船関連の遺構の文化財指定状況については、27自治体に取り組んでいると回答している。文化財として指定されている具体的な遺構は図3の通りである。「絵馬・絵」が15自治体（55.6%）で最も多く、次いで北前船に関連する「屋敷」が9自治体（33.3%）と多い。

「その他」として特徴的なものは以下の通り

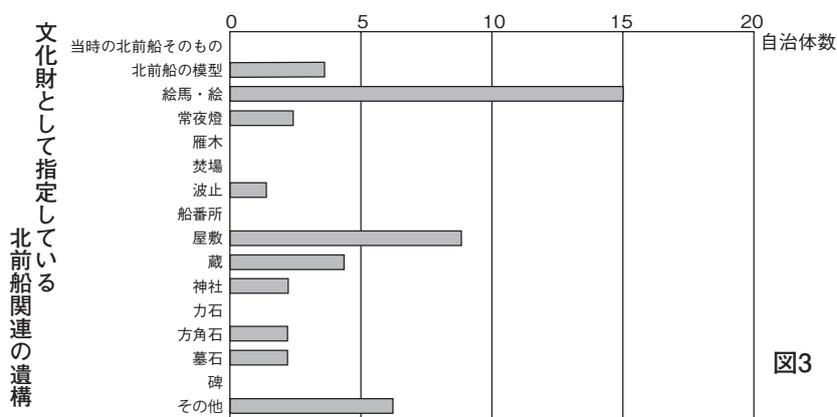


図3 文化財として指定している北前船関連の遺構（複数回答可）

である。

- ・ 北海道広尾町：石灯笼
- ・ 青森県佐井村：廻船御客帳
- ・ 青森県鱒ヶ沢町：常灯碑、玉垣群、御神輿渡御
- ・ 新潟県佐渡市：念仏橋、石橋、船つなぎ石、ちとちんどん（無形文化財）
- ・ 石川県加賀市：船主の仏壇・仏具
- ・ 兵庫県新温泉町：船路図、方位磁石

### 2-3-3. 案内板・説明板を設置している北前船関連の遺構

北前船関連の遺構への案内板や説明板の設置については、15自治体に取り組んでいると回答している。具体的には図4の通りである。「屋敷」が最も多く9自治体（60.0%）、次いで「模型」が5自治体（33.3%）、さらに「絵馬・絵」が7自治体（46.7%）、「常夜燈」が4自治体

（26.7%）となっている。

その他、案内板・説明板の対象物として特徴的なものは、以下の通りである。

- ・ 青森県鱒ヶ沢町：常灯碑、玉垣群
- ・ 新潟県佐渡市：念仏橋、石橋、船つなぎ石
- ・ 山形県酒田市：河村瑞賢による米置場跡
- ・ 石川県白山市：北前船主が住んでいた地域の場所跡

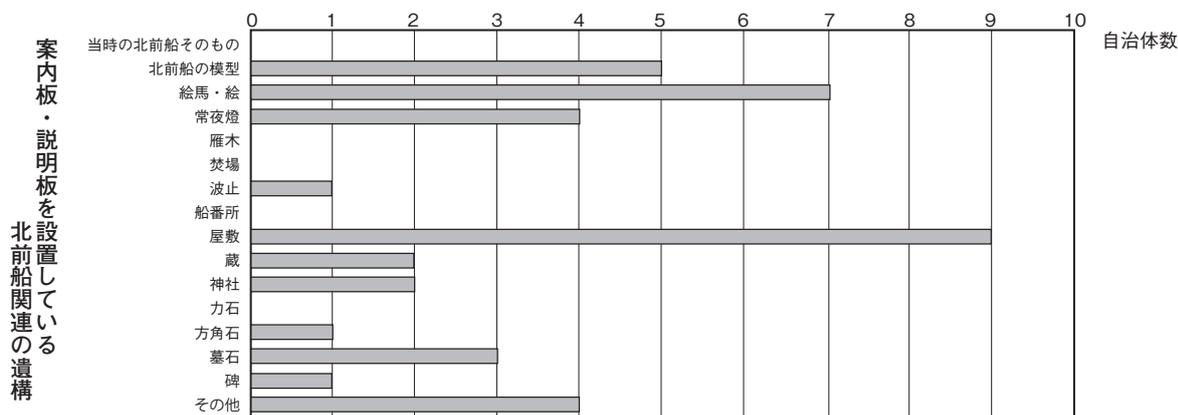


図4 案内板・説明板を設置している北前船関連の遺構（複数回答可）

## 2-3-4. 北前船関連のイベント（講演会、物産展、企画展示等）

北前船関連の講演会、物産展、企画展示等のイベントについては、11自治体が実施していると回答している。具体的には表5の通りであり、その数は少ないが、各地で多様なイベントが行われていることが分かる。

特に、富山県高岡市では、講演会、物産展（北前船物産展）、企画展示（船箆笥展、アイヌ衣裳展、引札展）の他、北前船フォーラム（伏木港開港100周年、1999年）など多様なイベントを展開している。また、北海道函館市と兵庫県洲本市では共通して高田屋嘉兵衛をテーマにした祭を実施している。

表5 北前船関連イベント（講演会、物産展、企画展示等）の実施状況

都道府県名	市町村名	講演会	物産展	企画展示	その他
北海道	函館市				■江戸時代後期に北前船交易で活躍していた高田屋嘉兵衛のお祭りを毎年7月下旬、8月1日に実施。
青森県	五所川原市			■(内容不明)	
秋田県	男鹿市				■秋田船方節全国大会 (北前船の船頭たちが港に立ち寄り酒席で唄った)
新潟県	佐渡市				■白山丸祭
富山県	高岡市	■(内容不明)	■北前船物産展	■船箆笥展、アイヌ衣裳展、引札展	■北前船フォーラム（伏木港開港100周年、H11）など
	富山市			■森塚特別展	
石川県	加賀市			■テーマ展示（毎年2回開催）	
	小松市	■(内容不明)			■歴史文化教室、曳舟巡航（祭での）
福井県	南越前町	■「西廻り」航路フォーラム (報告、講演、シンポジウムなど)			
兵庫県	洲本市				■高田屋塾、高田屋祭
	豊岡市				■北前まつり（北前船パレード、ステージイベントなど）

## 2-3-5. 北前船関連の勉強会・研究会

北前船関連の勉強会や研究会については、11自治体が実施していると回答している。具体的には表6の通りで、特徴的なものとしては、以下の通りである。

- ・ 富山県富山市：住民約40人参加し、岩瀬バイ船文化研究会を開催している。富山市岩瀬に残るバイ船（北前船）文化を研究し、地元の歴史・文化の解明に努め、これまでに「バイ船研究」を第1～5集発刊している。

- ・ 石川県小松市：小松安宅の渡海線・安宅湊の歴史について研究会を実施している。また、市民講座を開催し、約60名もの住民が参加している。
- ・ 福井県南越前町：河野北前船研究会（約60名）が主催する形で、北前船に関する研究報告・講演会などを行っている。
- ・ 兵庫県新温泉町：約80名もの住民が参加し、行政などと共同で諸寄港と但馬海運史についての研究会を実施している。

表6 北前船関連の勉強会・研究会の実施状況

都道府県名	市町村名	主催者			参加者（数字は人数）			内容
		行政	住民	その他	行政	住民	その他	
新潟県	出雲崎町	■					無記入	無記入
	佐渡市		■				無記入	建造記念館の作成
富山県	富山市		■				■40	岩瀬バイ船文化研究会：富山市岩瀬に廻るバイ船（北前船）文化を研究し、地元の歴史・文化の解明に努める。 「バイ船研究」第1～5集発刊
石川県	加賀市	■	■		■5	■30	■30	北前船に関する講演及び研究発表
	小松市	■					■30	小松安宅の渡海線・安宅湊の歴史。別に市民講座60名（住民）
	輪島市		■				■?	無記入
福井県	南越前町			河野北前船研究会	■10	■30	■河野北前船研究会60	北前船に関する研究報告・講演およびシンポジウム等
兵庫県	洲本市			財団法人			■50	無記入
	新温泉町	■	■		■10	■80	■20	諸寄港と但馬海運史について
	豊岡市			竹野観光協会		■10	■竹野観光協会	
山口県	光市		■			■10		室積落と北前船について

### 2-3-6. 北前船関連の商品

北前船関連の商品を企画や開発、販売については、5自治体が実施していると回答している。具体的には、表7の通りである。このうち、佐渡市が最も多様な商品を揃えている。具体的に

は建造記念誌、はがき、切手、DVD、Tシャツである。また、小樽市では時計や絵はがき、加賀市では展示図録やテレカ、南越前町でもお土産商品、関連書籍などの商品がある。

表7 北前船関連の商品

都道府県名	市町村名	北前船関連の商品
北海道	小樽市	時計、絵はがき
新潟県	佐渡市	建造記念誌、はがき、切手、DVD、Tシャツなど
石川県	加賀市	展示図録、テレホンカード
福井県	南越前町	お土産商品、関連書籍など
兵庫県	豊岡市	無記入

### 2-3-7. 北前船関連の観光施策の予定

今後の北前船を活かした観光施策を実施する予定が「ない」と回答した自治体は60自治体(48.4%)で半数以上を占めている。また「わからない」も41自治体(33.1%)に上る。一方、何らかの計画が「ある」と回答した自治体は7自治体(5.6%)に留まった。「ある」と回答した自治体の具体的な計画は以下の通りである。

- ・ 北海道松前町：北前船記念公園の整備(道の駅)。
- ・ 北海道江差町：計画はあるが、具体的なものについては未定。
- ・ 福井県南越前町：建物、資料等の文化財指定等を検討中。
- ・ 石川県小松市：公民館主体の歴史教室。
- ・ 富山県富山市：森家特別展案内板設置。
- ・ 富山県射水市：新湊地区、内川周辺にて、「水辺のまち夢プラン」について旧回船問屋を北前船資料館として展示公開する事を計画。
- ・ 山形県酒田市：経済産業省支援事業「やまがた出羽の国『庄内』地域活性化コン

ソーシアム」。

### 2-4. 小括

#### (1) 北陸地方と関西地方の日本海側で積極的な取り組み

北前船の寄港地の約半数が、地元の資料館等での資料の常設展示、北前船関連の遺構の文化財指定、案内板・説明板の設置等に取り組んでいることが判った。意識または活用の広がりとしては、1項目もしくは2項目程度の取り組みが多く、その大半は地元の資料館等で常設展示を実施するタイプと、地元の資料館等での常設展示に加えて文化財として保全するというタイプの何れかである。また3項目以上の取り組みを実施している自治体も少なからず存在し、特にこれらは北陸地方と関西地方の西側に多いことが明らかになった。

#### (2) 資料収蔵・展示施設の多さと、観光客の利用

北前船を主題にした施設は14自治体で17施設、また地元の資料収蔵・民俗資料収蔵・展示施設における収蔵・展示は47自治体で64

施設において実施されている。56もの自治体が、前者後者いずれか、または両者の施設を有している。すなわち、回答のあった124自治体の凡そ半数において、北前船に関する資料を収蔵・展示する施設を有していることが明らかになった。また殆どの施設において利用者の8割以上が観光客であることもわかった。かなりの自治体において北前船の歴史的・文化的価値が認められており、観光客も北前船に興味を示していると言えるだろう。

### (3) 自治体ごとに点在する、多様な資料・展示物とイベント、研究会、商品開発

また資料・展示物についても、「北前船の復元模型」、「北前船やまちについて説明したパネル」「北前船関連の絵馬」、「船乗りの道具」、「北前船関連の古文書」、「錨」、「方角石」、「力石」、「常夜灯」など、多種多様な資料・展示物が、自治体ごとに保全、管理されていることがわかった。特に、「北前船の復元模型」については、地元住民がまちのシンボルとして積極的に行政に働きかけをして建造されたものもある。北前船を主題にした14自治体17施設を除けば、一つの自治体に決して多くの種類の資料・展示物があるわけではない。しかしそれぞれの自治体は、他自治体にない独自の資料・展示物を有している場合が多いことも分かった。また資料・展示物同様に、数は多くはないものの、独自のイベントや研究会、商品開発を行っている自治

体があることが分かった<sup>(9)</sup>。

### 3. 「北前船」をテーマとした広域観光の現状

前章の表3（北前船を主題とした施設）、表4（地元の郷土資料・民俗資料収蔵・展示施設等）のとおり、隣県同士、または同一県内における近隣市町村において、展示資料、取り組みに多様性があることが判明した。他市と異なる独自の展示物や資料を有している自治体も多い。すなわち北前船に関しては、実際に広域観光資源として活用できる資源が揃っていると判断される。特に北陸地方と関西地方の西側では、その可能性が十分あると考えられる。

本章では北前船の広域観光資源としての可能性を前提とした上で、実際に広域観光を行っている自治体ではどのような取り組みをしているのか、について明らかにしていきたい。

#### 3-1. 広域観光としての北前船を活かした取り組みの実態

アンケート調査で北前船に関連して他市町村と連携した取り組みがあると答えたのは延べ5自治体で、2事例のみである。これらの自治体の取り組みの具体的な内容や経緯について詳しく見ていくことにする。

##### 3-1-1. 北海道函館市と兵庫県洲本市の高田屋嘉平を通じた連携

北海道函館市と兵庫県洲本市は、江戸時代後期に北前船交易で活躍した豪商である高田屋嘉

(9) この調査を踏まえれば、今回北前船に関する取り組みを「特に行っていない」と回答した60自治体でも、何かしらの北前船関連の資料等の存在や取り組みが有ることが推測できる。特に、今回の調査では、基本的に教育委員会や文化財課などではなく、観光担当課から回答を得たため、観光担当課の回答者が資料・展示物を見落として回答している可能性もあり得る。今後はこれらの分の北前船に関する資料の収集及び発掘も行うべきである。

平に着目した交流を行っている。具体的には、函館市で毎年7月、洲本市で毎年8月に行われる「高田屋嘉平祭」を通じた交流を実施している。函館市は、「高田屋嘉平祭実行委員会」が連携の中心であり、洲本市側も民間組織の「高田屋顕彰会」が中心となって交流を行っている。具体的には、踊りチームがお互いの祭に出向くという交流である。しかし、現在のところ、この祭り以外では交流は行われておらず、観光資源の広域的な活用という段階には至っていない。

観光担当課はこの成果として、高田屋嘉平を通して、互いの街の歴史・文化を知ることができ、相互理解が深まる、また異なる文化で育った祭りが集結することで、祭の盛り上がりには花を添え、観光としての活性化への寄与を挙げている。一方課題としては、踊りのチーム等の高齢化による継続性の問題や、双方の自治体に共通して若い世代で高田屋嘉平への関心が低く、祭りを通じた交流の継続性を挙げている。

函館市では北前船という切り口で、近隣の北海道江差町などと連携していくことが出来れば良いと考えているが、市全体の観光行政は、観光の国際化への対応の優先度が高いために、北前船を通じた広域観光について、特に積極的に考えているわけではないというのが実情である。

### 3-1-2. 滋賀県彦根市と北海道江差町、松前町の物産展を通じた連携

1986年に江差町の「北前船まつり」で彦根市の物産即売を行うなどの連携を実施してい

る。また、彦根市では毎年「交流都市と彦根の観光物産展」を行っているが、この物産展において江差町と松前町が出展している。これは、両市とも北前船で商売をしていた近江商人に共通してゆかりがあり、近江商人による物産の流通の歴史をもっているためである。この物産展には毎年多くの観光客が訪れている。

しかし北前船以外にも観光資源が多くある彦根市では、北前船に特化した取組みや北前船を活かした広域観光へと展開させていく予定はない。

### 3-2. 広域観光としての北前船を活かした取組みの予定

2-3-7で言及した、今後の北前船を活かした何らかの観光施策の計画が「ある」と回答した7自治体(5.6%)の中で、広域観光を意識した試みとしては、山形県酒田市が回答した「やまがた出羽の国『庄内』地域活性化コンソーシアム」がある。この事例について詳しく紹介する。

「やまがた出羽の国『庄内』地域活性化コンソーシアム」は、庄内全域を対象に、「北前船」や絹産業など、地域に息づく江戸期の歴史・文化を掘り起こすとともに、最新の情報技術を活用した観光インフラの整備によって他地域と差別化を図り、人的交流・物流の活性化を図る取組みで、2007年から3年間実施される予定である。このコンソーシアムは2006年12月に山形県内の10企業・団体で設立された広域観光振興会社「北前船庄内」を代表団体に、J R東日本や酒田、鶴岡両商工会議所、庄内観光コン

ベンション協会、庄内映画村などを加えた計18企業・団体が構成されている。具体的には、包括的な旅行手配や情報発信を行うコーディネーターの育成、体験観光のインストラクターの育成、地場産業や地元商店街を巻き込んだ集客メニューの充実、買い物の決済機能をもつICカードの導入、観光施設への携帯案内システム用QRコードの設置などを展開していく予定である。

### 3-3. 小括

「北前船に関連して交流している自治体がある」と回答した5自治体では、実態として、自治体が積極的に広域観光施策に取り組むまでには至っていない。北海道函館市と兵庫県洲本市は観光というよりもむしろ民間レベルで相互に高田屋嘉平のゆかりの地として「親睦を深めている」程度の取り組みで、北前船を活かした広域観光まで行き着いていない。また、滋賀県彦根市と北海道江差町、松前町においては、物産展での交流にとどまっており、広域観光にまで行き着いていない。

しかし、今後実施予定の計画として、山形県庄内地域の「やまがた出羽の国『庄内』地域活性化コンソーシアム」は先進的なものであり、北前船を活かした「民間主体」の広域観光を推進する可能性がある。

## 4. まとめと提案～広域観光資源としての北前船の可能性～

### 4-1. まとめ

本稿で得られた知見を以下にまとめる。

### (1) 観光資源としての北前船の意識または活用の動向

北前船寄港地を持つ自治体のうち約半数において、北前船に関連した取組みがなされていることが分かった。特に、北陸地方と関西地方の日本海側において積極的に行われていることが明らかになった。

### (2) 北前船に関する施設、その展示内容、収蔵物の実態

北前船を主題とした施設は、北陸地方と関西地方の日本海側に集中して存在している。こうした施設は北前船に関連した多様な資料・展示物を持ち、主に観光客を迎え入れていることが分かった。また、北前船を主題としたものでなくても、地元の資料館も、北前船に関連した多様な資料・展示物を所有していることが分かった。資料・展示物については、前者後者の施設共に、北前船の復元模型が最も多く、中には地元住民が行政に働きかけをして復元に至ったケースも見られた。

### (3) 北前船に関する文化財、案内板・説明板、イベント、勉強会や研究会、商品の実態

北前船に関する取組みとして、遺構の文化財指定や案内板・説明板の設置なども、絵馬や絵、屋敷や北前船の復元模型を中心として各自治体で行われていた。また、イベントや勉強会・研究会、商品開発などは、数としては少ないが、積極的に実施している自治体も見られた。

#### (4) 北前船をテーマとした広域観光の実態

北前船を活かした広域観光は、実質的には近年では全く実施されていないことが明らかになった。民間レベルで親睦を深めるようなレベルでの交流などは見られるが、自治体の施策上での広域観光のための連携は見られなかった。つまり、各自治体単位では多くの自治体が北前船を観光資源として意識し、実際に観光施策を展開しているが、広域観光には全く展開していないという現状が明らかになった。

以下、こうした状況となっている原因について考察を加え、今後の取り組みについて提案を行う。

### 4-2. なぜ、広域観光資源として北前船を意識または活用していないのか

#### (1) 広域観光を展開するにあたっての基礎的情報の不足

今回の調査で、各自治体には多様な資源や取り組みが存在することから、広域観光の可能性はあることは十分に分かった。しかし1-3でも述べた通り、これまで北前船の広域観光資源としての可能性を検討する際に必要な、北前船寄港各都市での北前船の観光資源の現状についての悉皆的な整理が行われていないため、他の寄港地の情報が行渡っていない。従って、他の寄港地との連携、比較という視点が見られず、各自治体では北前船寄港地としての、あるいは北前船寄港地の中での個性を見出せないと考えられる。

#### (2) 広域交通手段としての航路の不足

北前船の寄港地同士を結び付けていたのは舟運であった。しかし、現代においては、観光の足となる交通機関としての航路が殆ど存在していない。今回の調査で明らかになったように、各自治体において北前船関連の観光資源が存在していたとしても、それらを結び付ける交通手段自体が北前船との関係を欠いているため、積極的な広域観光化が図られにくいと考えられる。

#### (3) 文化財としての側面の強さ

北前船は、その歴史的・文化的価値ゆえに、「文化財」として意識されている傾向が強い。そのため、例えば各自治体では、北前船に関する情報は観光課あるいはまちづくり関連課ではなく、教育委員会などの別組織が有していることも多く<sup>(10)</sup>、観光資源として活用していくための体制が十分に整えられていない。

### 4-3. 北前船をテーマとした広域観光の展開に向けた提案

#### (1) 全国北前船関連観光資源総覧の作成

例えば、本稿で報告した調査結果などに基づいて、全国の北前船関連の観光資源をリストアップした総覧の作成が望まれる。各自治体が他自治体における資源を知ることが、自らの資源の特性、位置づけを認識し、連携の可能性を探る契機を提供すると考えられる。少なくとも、本稿で明らかにしたようにかなりの自治体が積

(10) 今回のアンケート調査は各自治体の観光担当課を対象に実施したが、実際にアンケートに回答したのは教育委員会である場合も散見された。

極的な北前船をテーマとした観光施策を展開している北陸地方と関西地方の日本海側では至急の作成が期待される。

## (2) 観光交通手段としての二点間航路の再整備

北前船寄港地同士を結ぶ交通手段としての船舶の再生を押し進める必要がある。既に、例えば広島県福山市鞆の浦と広島県尾道市との間の夏季週末の定期便の運行のような試みもある。現在の船舶利用者数、利用特性からは長時間をかけて幾つかの寄港地を巡っていく航路よりも、2点間で需要が高い航路に絞って整備を行っていくのが得策であると考えられる。

### <参考文献>

- 1) 中尾清 (2005) 「特集広域観光の潮流」月刊『観光』465、pp16-18
- 2) 鏡啓記 (2002) 北前船おっかけ旅日記、無明舎出版
- 3) 鏡啓記・加藤貞二 (2002) 北前船－寄港地と交易の物語、無明舎出版
- 4) 北前船未来海道 HP : <http://shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/kitamae/>
- 5) 北前船町づくりシンポジウム資料 (1998) 財団法人日本ナショナルトラスト

## (3) 観光まちづくりという視点の導入

文化財としての側面が強い北前船を観光に活かすためには、単純に観光客誘致を至上命題とした従来型の観光開発ではなく、観光客誘致の前提として、地域の個性の再発見や誇りの回復を目指す観光まちづくりの視点を導入することが重要であろう。かつて北前船が運んでいたのは、各地域の地場の産物であった。例えば、そうした産物の生産、流通などを手がかりに、地域の生活文化を再発見し、その中で交流の歴史や文化を再認識していくことが重要であろう。